

# 輸入が急増した 野菜類を検証する

2010年は国産野菜が品薄高値となったため、生鮮野菜の輸入量が前年より35%増え、約79万tとなった。輸入全体の4割以上を占めるタマネギが64%増、ニンジンが56%増、ネギが54%増、さらにキヤベツは79%増など、主要品目で大きな増加を見せた。特に3~4月および9~12月の輸入量が前年を

大きく上回っており、それらのうち6割が中国産(12万5000t増)、3割が米国産(5万8500t増)だ。需要構造から見ると、主要品目において輸入品を多用するのは加工・業務用需要が中心である。一方で小売需要の利用が多い卸売市場では、どんな影響が出ているのかを検証してみよう。

## 野菜生産者のための相場研究

### タマネギ

#### 相場4割高で34万t輸入。

##### 【概況】

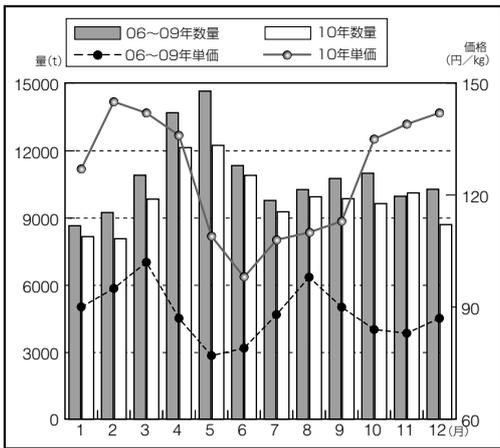
10年の東京市場のタマネギは、入荷が順調だった07~08年と比べて12%程度の入荷減となり、過去5年の平均価格の44%も高いキロ125円と暴騰した。各月の入荷を見ると、前半は、近年入荷が少なかった09年をさらに下回っている。後半に関しては前年より入荷増となったものの、過去5年の平均値より少なく、単価高推移となった。輸入品の割合は、中国、米国を始めとして1割を超えた。

#### 国産の作柄回復が輸入依存を解消

##### 【今後の対応】

今年1月になって、タマネギは国産が品薄高になっており、中国産だけでも輸入量が7000tと、前年同月の2倍になった。国産の出回りが増えない限り、輸入量が前年を上回るペースが続くが、今後は九州産の出荷があるほか、生産面積増の産地や地産地消的な生産導入もある。本命の北海道産についても、今年は生産意欲が例年になく強い。タマネギは国産が安定している限り、構造的に輸入量は増えないことを銘記したい。

10年のタマネギ輸入量は、日本全体で34万tだった。東京のマーケットは日本の約1割の需要があるから、単純計算では3万4000tだが、東京市場での輸入量は1万t強。2万数千tが市場を経由しないで流通したことになる。市場の平均価格は半年より4割以上高いキロ125円、これに対して輸入品の平均単価は同42円(港到着価格)。中国産などは「剥きタマネギ」の状態でも50~60円とされるから、加工・業務需要は輸入品頼りになる。



### ニンジン

#### 中国依存から豪州、台湾に分散。今年は国産の安定供給なるか

##### 【概況】

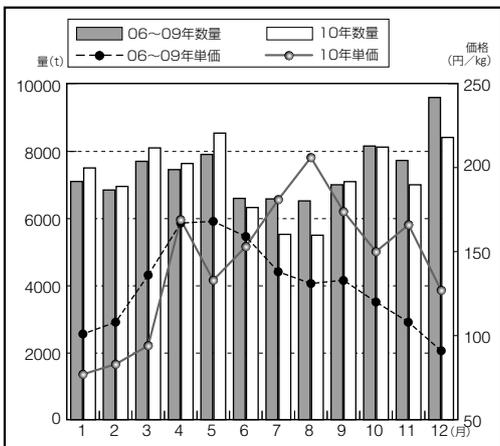
10年の東京市場のニンジンは、入荷量が前年より4%減で、キロ単価は140円と14%高くなった。前年の年間キロ単価が120円前後だったことからすれば、かなり高い相場だといえる。実は06年に145円、08年に145円と、隔年で高くなっていることになる。いずれも翌年が入荷増の単価安になる点が共通している。高くなる年は入荷量が減少するため、輸入が増えるという原則もある。

##### 【背景】

10年の輸入量は、前年を56%も上回って6万5000tを超えた。同様の輸入量があったのは07年で、この年は東京市場への入荷が近年にないほど多く、9万3000t近くあり、キロ単価も暴落して100円であった。原因は、前年が大幅な入荷減で単価が145円と高騰したため、国内産地が総じて生産出荷を増やしたからだ。08年、09年の輸入量は減って3万t台。中国産の敬遠気運が高まり、この2年で国産が代替した。

##### 【今後の対応】

加工・業務向けのニンジンは、中国産から国産へ転換が進んだかと思われた。ところが10年は、主産地の千葉も北海道も一年を通じての天候不順で軒並み凶作基調となり、背に腹は代えられぬと中国産を始めとする輸入品依存に戻った。ただし中国産の入荷割合は減っており、ニュージーランドやオーストラリア、台湾産などに分散した。今年1月の輸入量は約3000tと、前年の3倍。今年は国産の巻き返しを期待しよう。



# 今年の市場相場を読む

単価4割高く5万t輸入。干葉産の2割減響くが今年は回復へ

## ネギ

### 【概況】

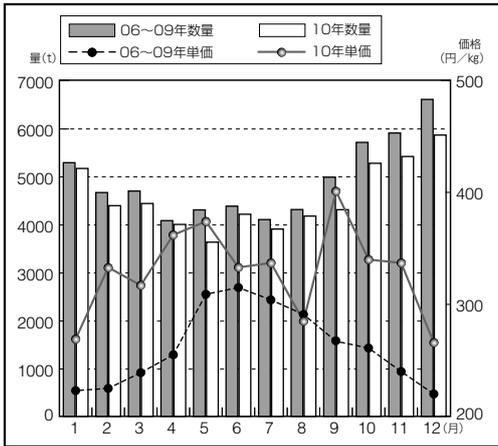
東京市場のネギの入荷量は、08年には近年稀なほどの入荷増となったものの、単価はむしろ強含みで推移した。09年には入荷がやや抑制されたが、10年は08年と比べて1割以上の入荷減となり、単価は前年比43%高でキロ327円と高騰した。10年の入荷量はどの月も平年実績を下回り、8月以外は単価も上回った。主産地の干葉が前年より2割も出荷を減らし、シェアが25%から20%にダウンしたことが響いている。

### 【背景】

かつて7万t以上もあった輸入ネギも、近年は減少傾向で、特に09年、10年は3万t台まで落ちた。ところが10年は前年より54%もの増加で、5万tを超えた。ただし今年に入ると、ほかの主要品目の増勢が続く中、ネギの輸入量は前年実績を下回っており、国産が巻き返しているように見える。これは業務需要が低迷している証拠だ。主産地である千葉、茨城、埼玉は、遠隔産地に比べると系統出荷の割合が低く、供給が安定してきている。

### 【今後の対応】

長ネギは業務用のウエイトが高い品目である。家庭用なら小ネギでも青ネギでも代替が利くが、業務用については長ネギは必需食材である。不作時には東京市場に荷物が集まる傾向にあるが、その東京市場で2割もの入荷減となるほどだから、昨年は緊急輸入が必要に対応するため、東京市場から転送したことから、さらに高騰した。ネギは各地で生産意欲が高いため、今年については輸入量が急減するだろう。



## キャベツ

### 【概況】

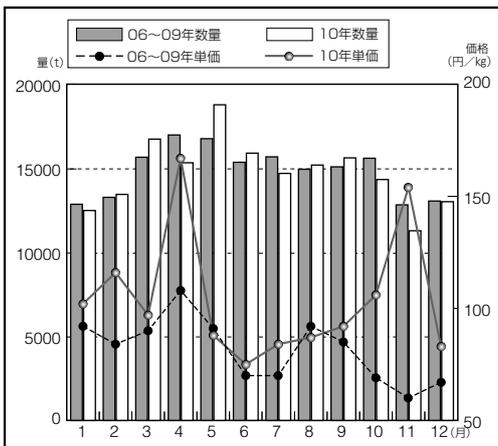
10年の東京市場のキャベツは、入荷量が前年より6%程度の減少となったものの、年間で17万7000tという数字はほぼ平年並み。しかし平均単価は前年より24%高いキロ103円と高騰した。露地物の中では比較的安定した品目であり、昨年の天候不順に耐えた部分もあるが、家庭用、業務用にとっても基幹的な食材であるだけに、ほかの野菜が品薄になる中で需要がより集中したということだ。

### 【背景】

キャベツの国内需要は、180万t近くあると思われる。10年の輸入量である2万3000tは、前年より8割近く増えたといっても、全体からすればわずかな量だ。輸入の大部分を中国産が占めており、その価格はキロ37円。ほとんどが加工仕向けだ。東京市場では、10年に入荷した輸入キャベツのうち、中国産が173t、韓国産が211t。小売店用ではなく、加工業務用の原材料として卸売会社が手当てしたものだ。

### 【今後の対応】

今年1月のキャベツの輸入量は約1200tと、前年同月の13倍もの数量があった。加工・業務用需要者が昨年苦心した、国産の不安定さへの警戒感が輸入増を招いている。他方でここ2、3年、各地で加工・業務用の大玉生産や契約取引が目立って増えている。昨年は一年を通じて天候不順にたたらたが、それでも甚大な影響を受けずに済んだのは、大小の生産が存在したことで供給の奥行きが出てきたからだろう。



流通ジャーナリスト

### 小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オビニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」、「レポート青果物の市場外流通」、「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

市場入荷は平年並みだが24%も高騰。加工業務用の新規産地化で供給力増